

今日は3月20日。今年度の終業式の日です。
進路指導課長の高見先生から、3月1日に卒業した3年生の進路状況の報告がありました。「就職55名、進学100名」で、155人全員がそれぞれ進路を決めて4月を迎えることとなりました。
本当に頑張った3年生諸君に、私はこんな式辞を送りました。

この冬、日本列島全体を覆い尽くした大寒波は津山の地にも襲来しましたが、その猛威もようやく遠のき、春の息吹がそこかしこに感じられる今日の佳き日、岡山県教育委員会より委員の松田欣也様、また本校同窓会会長全本和由様を始めとする多くの来賓の方々の御臨席を賜り、第七十回卒業証書授与式をこのように盛大に挙行できますことは、卒業生はもとより、在校生、教職員一同にとって、この上ない喜びでございます。厚く御礼申し上げます。

ただ今卒業証書を手にした155名の皆さん。卒業おめでとう。

皆さんは、入学当初から「初めての」という形容語が付く学年でした。それまでの3学科5クラス体制が、地域ビジネス科と情報ビジネス科2学科4クラス体制となった「初めての」学年だったからです。それに伴い校内の様々な物事が、「初めての」方法やあり方へと移行しました。その中で大きく変わったものの一つが今年度の自彊祭の体制でした。赤・青・桃の3団に緑団を加えた4団編成で各団とも全学年1クラスが所属となり、スッキリした構成にはなったものの、全校生徒の人数は減ったのに団が増えて肝心の中身はどうなるのかと、内心危惧していました。しかし、それは杞憂に終わりました。最上級生である皆さんが見事な指導力と統率力を発揮し、各団とも文化の部・体育の部それぞれで、个性的で楽しいパフォーマンスや若い力に溢れる競い合いを見せてくれたのです。

自彊祭だけではありません。皆さんは「初めての」学年というプレッシャーに押しつぶされることなく、「初めて」だからこそ持てる新鮮な気持ちや期待感を胸に、2学科体制となった津商新時代のパイオニアとして自らを磨き成長させ、日々の学習や特別活動、資格取得、部活動に、そして進路実現についても、すばらしい成果を上げてくれました。そんな皆さんを校長として送り出せることを、嬉しく誇らしく感じています。

もう一つ、私には皆さんに寄せる特別な思いがあります。三年前の四月、満開の桜の中を緊張した面持ちで入学式に臨んだ皆さんを、私は新任の校長として迎えました。その日以来、皆さんと共に津山商業の一員としての日々を過ごしてきましたが、今日、卒業の時を迎えた皆さんを送り出した後、私も定年退職という「卒業」を迎えます。その意味で皆さんは、私の同級生です。親子以上に歳が離れているけれど、同じ三年間を津商で共有した大切な同級生なのです。

津商新時代のパイオニアたる皆さんに、校長として、ともに津商を築立つ同級生の一人として、贈りたい言葉、二つの歌の歌詞があります。

校長として贈りたいのは、校歌の三番の歌詞です。

本校の校歌の一番と二番は、学校行事など生徒が一堂に会した際に斉唱します。この式においても、皆さんは「在校生としての最後の校歌」を声高らかに歌ってくれることでしょう。三番の歌詞は「生徒必携」などには載っていますが、校歌斉唱は常に一番と二番のみのため、もしかしたら三番の歌詞の存在を忘れていた人もいるのではないのでしょうか。

三番の歌詞は、次のように綴られています。

校風ゆかしき真実の一路 あふるる友愛手を引きつれて

自彊の足並み乱れず倦まず 文化にいどみて誉れを競う

ああ見よ樹草の息吹も高く 美わし学園津商ぞわれら

津商で究めた真実と育んだ友情を手し、「大自然の永久不変の営みを手本に自らを鍛え励む」という校是「自彊」の精神で文化の創造に挑もうと

いう、強い気概と高い矜持に溢れています。一・二番で描かれている豊かな自然に囲まれた学び舎で育んだ力を、実社会でどんな姿勢でどのように活かすかの決意表明と言えるかもしれません。

こんな素晴らしい歌詞をなぜ歌わないのか。「三番まで歌うと長くなるから」との単純な理由なのかもしれません。しかし後付けではありますが、別の解釈もできると思います。一番大切なことは外に出さないのをよしとする美意識です。津商の日々で育んだ力と技をどう活かすかは口に出さず、心の奥底に潜めて行動で示すという「不言実行」の態度と言ってもよいでしょう。

津商新時代のパイオニアたる卒業生の皆さん、どうか本校の校歌を三番まで、しっかり胸に刻んでください。そして「自彊の足並み乱れず倦まず文化にいどみて誉れを競う」姿勢で、これからの人生を、皆さんが出逢う新たな世界を、よりよきものにしていってください。

もう一つは、かなり年上で人生経験を積んだ同級生として贈るのは、中島みゆきの「糸」の二番の歌詞です。

＜ 歌 詞 略 ＞

「自彊」の精神と姿勢で世界をよきものにしてほしいという校長としての私の願いを、皆さんはしっかり受け止めてくれたことでしょう。しかし長い人生の中では、頑張ろうとするほど、高い目標を目ざそうとするほど、道に迷ったり挫折や絶望を味わったりして、心が傷つきささくれ立って、自分も他人も信じられなくなることがあります。そんな時は、どうかこの歌を思い出してほしいのです。心のささくれは夢実現のために尽くした尊い証しです。ささくれ傷ついた経験がある人ほど、その痛さも傷の尊さも分かり、他人のささくれをかばうことができます。同様に、あなたの傷の痛みを優しくかばってくれる誰かがきっとどこかにいます。

保護者の皆様、お子様方の晴れの門出を心からお祝いするとともに、これまで本校教育の推進に多大な御理解、御支援を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。また私のような輩が立った者が、大切なお子様方の同級生を名乗った非礼をお詫び申し上げます。しかしこれからも同級生の一人として、お子様方の輝かしい未来を、皆様と共に見守っていきたいと思っております。どうぞお許しください。そしてお子様方の母校となった津山商業を、変わらず御支援いただければと思います。

卒業生の皆さん、皆さんの入学式の式辞で私は、先ほどの「糸」の、「逢うべき糸に出逢える仕合わせ」を謳った最後の歌詞を贈りました。

津山商業にとって、私たち教職員にとって、皆さんは逢うべき糸であり、皆さんと出逢えたのは本当に仕合わせなことでした。皆さんにとってもそうであることを信じています。門出の時にあたり、それぞれの進む先で更なる仕合わせな出逢いがあることを祈り、式辞といたします。

二つの歌の歌詞に、精一杯「同級生」である3年生諸君へのはなむけの思いを込めたつもりです。

地域ビジネス科総代の八幡君と情報ビジネス科総代の佐子さんへの卒業証書授与、県教育委員会松田委員と全本同窓会長の祝辞、生徒会副会長下山君の送辞。式は厳肅かつ円滑に進み、卒業生の答辞を迎えました。生徒会長と野球部主将を務めた池田陸君は、スポーツマンらしい爽やかではきはきした様子で3年間の思い出や、生徒会長立候補に際して自分の背中を押してくれた先生とのエピソードを語ってくれました。「この調子で、最後まで力強いスピーチとなるだろう」と思いきや、自分を支えてくれた親御さんへの感謝の部分で思わず声が詰まりました。涙の「ありがとう」に、私同様目頭を熱くした生徒諸君や保護者の方々も少なくなかったはずです。



一般入試も無事終わり、新入生となる160名の合格者を発表した後の今年度最後の職員会議。「挨拶」に代えて先生方に次のような文章を配りました。

38年の高校教員生活が残り2週間となり、改めて実感しているのは、「学校という職場、教員という職業の楽しさ、すばらしさ」です。自分は年を重ねて人生の折り返しを過ぎても、常に「生徒」という輝かしい未来のために時間を費やせる仕事は、他にはあまりないと思います。

とりわけ最後の3年間で、津山商業高校で皆さんと過ごせたのは、私にとってとても幸せなことでした。

私は、十数年前から抱いていた「生徒主体の授業への改善を学校全体で図る」という教師としての方向性を最後まで貫いて、校長として学校経営の柱として掲げることができました。それは本校が、津山の地にある商業高校であり、「チーム津商」のメンバーとして先生方がいてくださったからに他なりません。本当にありがとうございました。そしてお世話になりました。

もう一つ幸せだったと感じているのは、最後の2年間に国研の研究指定という形で、特別活動に深く関われたことです。配布した「新学習指導要領における特別活動の構想」をテーマとする^{※注}会の報告にある「特活の本当の楽しさを知らないまま教員生活を終える人はかわいそうだ。一人でも多くの実践者を増やしたい。」との講師の言葉に、私はギリギリセーフだったなあと考えていますし、先生方にはぜひ本校で「特活の本当の楽しさ」を体感していただきたいです。そのためには、「特活で育成を目指す資質・能力の視点である社会参画・人間関係形成・自己実現を押さえた教科と特活との往還」を意識し、実践に活かすことが必要でしょう。ぜひとも来年度からの2年間の研究指定事業の中で、特別活動を核にしたカリキュラム・マネジメントによる授業改善を推進し、生徒に育成すべき資質・能力を伸長させてください。

※注一般財団法人初等教育研究所主催の第21回教育セミナーでの特活分科会



↑2月9日の国研研究協議会の様子

で実学としての商業の特性を発揮した、地域連携・地域貢献の取組ともなっています。ぜひ次の2年間の研究を通じて「特別活動を核にした「カリキュラム・マネジメント」の典型例となるような実践にブラッシュアップしてくれることを期待します。

私は退職して校長は代わりますが、2年間の成果と課題を受けて来年度から新たに2年間、特活の研究指定事業に取り組むことが決まっています。口幅ったいかもしれませんが、「特別活動と商業科を中心とする学びの往還で生徒に7つの資質・能力を育成する」レインボー・プロジェクトの取組は、これからの教育に求められている方向性の先取りであり、その教育的意義を立証する実践だったと思います。それに加えて

終業式。校長としての最後の式辞です。何を言おうか…と思いましたが、次のような話をしました。

おはようございます。

平成29年度の終わりを告げる式を迎えています。この一年間、色々なことがありましたが、大半はいいこと、楽しいこと、「津山商業の生徒達、がんばっているな、輝いているな」と皆さん自身もそう思えて、他の方々からも言ってもらえることでした。その上で3月1日の卒業式で3年生を無事送り出し、ここにいる皆さん全員の進級を認めて、この式を迎えられたことをとても嬉しく感じています。

校誌『自彊』の最初にまとめていますが、この1年間こうして壇上で話したことを振り返ると、本や新聞、好きな歌から引っ張ってきた「ちょっといいなあ」言葉やエピソードをネタにしています。が、今日はつい最近私に起こった「ホッコリする話」を紹介したいと思います。

先週の日曜日、仕事で東京に行くことになり、新幹線に乗るために、総社市にある実家に近い JR 桃太郎線の無人駅の東総社駅から列車に乗り込みました。入口のドアのすぐ右の座席に座って一息ついた時に、発車の際の衝撃で、財布、携帯、新幹線チケット等の一切をいれていたハンドバッグが閉まる直前のドアから飛び出てしまい、そのまま列車は出発してしまったのです。

慌てて運転手さんに訴えようとしたのですが「次の駅に着くまで待つて」と言われ、なす術もなく呆然とするしかありませんでした。

その時、同じ東総社駅から乗り合わせた御婦人が…その方は一人で御旅行らしく、御主人と思われる方に駅まで送ってもらっているのを列車に乗る前に見かけていました。もちろん知り合いではありません…がスマホを片手に「落ちたバッグは、主人が拾ったそうです。どうしましょうか？」と、声をかけてくれました。

ほぼパニック状態の私は、藁をもつかむ思いで「次の駅で降りて戻りますから、そこにいていただいいていでしょうか？」とお願いし、次の駅で降りて歩いて小一時間かかって、東総社駅まで戻りました。なにせ携帯がないため自宅に連絡も入れられず、田舎道のためタクシードロカ車も走っていない状況だったのです。スーツケースを引っ張って歩きながら、しっかりバッグを持っていなかった上に見ず知らずの人に「そこにいてください」と頼ってしまった自分の馬鹿さ加減にあきれ、自己嫌悪に陥りながら歩いて駅を目ざしたのですが、東総社駅に着くと、そこには私のバッグを手にした御主人がいてくださったのです。

「中身は無事でしたよ。そのまま置いて帰るわけにもいかないし、連絡も取れないので」と、見ず知らずの私のために、小一時間も待つてくださっていたのです。

何度もお礼を言って名刺を渡し、「フジイさん」というお名前を伺い、「ぜひぜひ御連絡先をお教えてください。改めてお礼をしたいので！」と言ったのですが「もういいから」と帰ってしまわれました。それ以後の連絡はありません。「もっときちんとお名前や御住所を聞けばよかった」と思いましたが、もし自分が逆の立場だったら、やっぱり「もういいから」と言うだろうなあと思い、私がフジイさん御夫妻から受けた親切のお返しは「人には優しくしよう。困っている人がいたら助けよう」を実践することで返そうと、改めて心に誓いました。

こうした困っている人がいたら「気の毒だな、自分にできることはしたあげたいな」という優しい感情が起こり、それを行動に移す

ことができるのは人間ならではだと思います。これから社会は AI が発達して、人間の仕事をどんどん AI がするようになり、人間のすることがなくなるという意見がありますが、私がフジイさん御夫妻から受けたような親切の元となる優しい感情を AI が持てるようになるとは、（私はもちろん皆さんが生きている間になるとは）思えません。

どうか「感情」という人間にしかない大切なものを、自分にも周りにもいい形で行動に表してください。「嬉しい」「好きだ」といったプラスの感情、あるいは「かわいそう」「何とかしてあげたい」といった相手への同情の場合、いい形で行動に表すことは難しくないでしょう。ぜひ皆さんにお願いしたいのは「嫌だ」といったマイナスの感情を持った時にも、拒否してしまうのではなく、どうしてそんな気持ちになるのかを考えて、その感情をいい形に変える努力をしてください。例えば、校則の中で「ウザい」と思うこと、「うるさい」と感じる先生の話があった時、頭からはねつけるのではなく、なぜそんな校則があるのか、なぜ先生はそう言うのかについて、自分なりに考えた上でそれでも納得できずに「ウザい」「うるさい」と思うなら、例えばホームルームで自分の気持ちと考えた過程を正直に訴えて話し合ってみるなど、マイナスの気持ちを解消するための賢い行動をとってください。津山商業高校という学校は、そうしたことができる場所です。商業は、マイナスをいい形でプラスに変えて、自分も相手も周りの社会もよりよくする「三方よし」の精神を学ぶためのものだと思いますから。

皆さんが、AI に決して負けない優しい感情の持ち主になってくれることを祈っています。

最後に、4月9日の平成30年度度の始業式、全員が元気でこの場に集えることを願って式辞とします。

私の粗忽ぶりを物語るもので、最後の式辞にはふさわしくないかもしれませんが、この話にしたのは涙が出るほどありがたかったフジイ御夫妻の親切への謝意とともに、生徒たちに「AI と人間」のことを訴えたかったからです。

実は「AI と人間」については、筑波大学の藤田晃之先生が仰っていることです。藤田先生とは特別活動が御縁で知り合い、明朗快活で澁淵としたお人柄や特別活動への深い愛情と造詣に感心して、先生の研究室のサイトを拝見したところ、その際見つけた「キャリア教育よもやま話」に載っていました。

街中で2度も大怪我をされ…つい先日と10年ほど前だそうです…その際に受けた「赤の他人」の優しさを例に挙げて先生は、「AI の開発が進んだとしても、繊細に相手の感情やニーズを感じ取り、心の通ったコミュニケーションに発展させ、適切な行動に移すスキルは、AI が代替できるものではありません。人間としての直感や情動に基づく意思決定は、AI が人間を凌駕することができない領域であると考えます」と述べておられます。

先生の言葉と自分が遭遇した出来事とが重なり、「三方よし」の精神を学ぶ商業高校の生徒だからこそ分かってほしいと思って迷わず式辞に選びました。「これが最後の云々」と、グダグダ昔話に酔ったりせずに終われてよかったと、自分では思っています。

まもなく今年度も終わり。私の津山商業での日々も終了です。それについてはまだ実感がないために「特別な思いはなし」というのが正直なところです。ただ職員会議の「挨拶」に書いたとおり、「学校という職場、教員という職業は、楽しくすばらしい」「高校教員生活最後の3年間を、津山商業高校で過ごせたのはとても幸せだった」ということを、強く強く感じています。この幸せが私への一方通行でないことを祈って、「校長便り」の筆を擱きたいと思います。

平成30年3月20日(火)